

とみがはら
富ヶ原 陽子

あぶり志紀で、サプリーダー・レクリエーション委員長として活躍する富ヶ原陽子。2015年に入社し、現在は職員を束ねる立場として日々業務に邁進している。そんな富ヶ原に、入社するまでの経緯や印象的だった出来事などを聞いた。

入社に至るまで

もともと人と接することが好きだった富ヶ原。一時は保育士になりたいという希望を持っていたが、友人から体験談を聞いて、介護業界に興味を持つようになった。

特別養護老人ホームで勤務していた時、株式会社あぶりがオープンングスタッフを募集していると知り、サービス付き高齢者向け住宅での経験も積みたいと思い応募。こうして介護職の経験者として入社したのだが、それまでとは違った難しさを経験することになる。

初心を胸に

入社したばかりの頃は、利用者様からそつけない対応をされることも多かったという。時には拒否されたり、突然怒られてしまったりすることもあった。だが、それら全てが本心からくるものではなく、不安から発せられることも多い。そんな利用者様の真意を考え、話を「聞く」のではなく、基本に立ち返り「傾聴する」姿勢を大切にしてきた。

その姿勢が報われたのは、入社しておよそ1年が経ってからのこと。ようやく「富ヶ原さんがいると安心できるわ」と言葉をかけてもらえた。そうやって心を開いてもらえるように、何事も積極的にコミュニケーションを取る姿勢が大切だという、シンプルなことになり気がされた1年目であった。

自らイベントを企画

複数の職場を経験してきた富ヶ原にとって、驚いたのはあぶりの風通しの良い職場環境だった。利

画・立案した。そのエイサーの団

体の方とも直接交渉して公演にこぎつけ、納涼祭は大盛況のうちに終わった。通常の業務と平行して準備を進めなくてはならず苦労も多かった。しかし、その分利用者様だけではなく、職員からも感動の声をもらい、自信に繋がったという。「皆で手間暇かけてつくり上げたイベントを職員自身が楽しんでくれることが何より嬉しい」と富ヶ原は話す。

いつでも有言実行

サプリーダーとして意識しているのは、職員全員が気持ち良く働ける職場環境をつくること。利用者様に対して質の良いサービスを提供するためには、まずは自身の働く環境が整っていないければならない。職員からの提言やアドバイスを積極的に受け入れ、改善できる部分はすぐに対応するようにしている。たとえば、同じ勤務時間内で業務に偏りが出ないように、利用者様の状態観察・情報収集をした上で平準化を図る取り組みを



用者様のためにアイデアを提案したり、イベントを企画したりすると積極的に採用してもらえる。社長と話す機会が普段からあることも含め、それらは今までの職場ではあまりなかったことだ。

富ヶ原が企画したイベントの一つに、沖縄をテーマにした納涼祭がある。きつかけは、プライベートで訪れた食の博覧会。そこで目にしたエイサーの躍動感に心打たれ、この感動を利用者様とも共有したいと思い、自身で納涼祭を企

してきた。また、普段の行動から常に「有言実行」を意識している。2019年、社内でも職員向けに開催された体づくりコンテストで見事優勝したのだが、開催当初から周囲の職員に、優勝すると宣言していた。実際に毎日も努力した。数ヶ月にわたって行われたこのイベントに、有言実行の姿勢で取り組んだ結果、優勝に繋がったのである。仕事もイベントも全力で楽しむ、そんな姿勢が見えるエピソードだ。

利用者様と
職員のために

「もともとは、人前に立って話すことがとても苦手でした」と話す富ヶ原。最初、レクリエーション委員長就任の話をもたらした際にも自信がなかったという。そんな中、いろいろなイベントを経験し、自身で劇の台本を書き上げ出演もし、利用者様から「良かった」という声をかけてもらったことで、自ら企画するまでになった。また、

職場環境の改善に取り組んだことで、サプリーダーとしての自覚を持ち、何事にも能動的に動くようになったという。プライベートでも、やりたいことをやるようにしている。すっかり遊ぶ。それがまた仕事の原動力にもなっている。

あぶりに入社して、自分を変えた富ヶ原。2021年は接遇に力を入れていきたいと話す。前向き、利用者様と職員の笑顔のために走り続ける富ヶ原を、これから

